札幌における1942・43年決定の都市計画公園に関する研究

A STUDY ON THE CITY PLANNING PARKS OF SAPPORO
DECIDED IN 1942/1943

鈴木 依理子*, 越澤 明**

Eriko SUZUKI and Akira KOSHIZAWA

City Planning Law was applied to Sapporo in 1923, and city planning streets, scenic zone and parks were decided in succession from 1936 to 1943. Planning theory and characteristics of city planning parks were the following.

- 1) The principle of the planning parks, boulevard system and scenic zone was to realize the theory of park system and green belt.
- 2) The layout of city planning parks was closely related to boulevard system, scenic zone and a typical green belt was uniquely planned in Sapporo.
- 3) The main purpose of parks was to utilize for outdoor recreation, sports and allotment.

Keywords. Sapporo, city planning park, park system, green belt, scenic zone

札幌、都市計画公園、公園緑地系統、緑地帯、風致地区

1、はじめに

1919年(大正8年)都市計画法が公布され、公園は街路、河川、運河、下水道などとともに都市計画法における都市施設の1つとして位置づけられた。そして都市計画法に基き都市計画決定され、さらに事業決定によって公園を計画的に整備していく制度手法が誕生した。その後1940年の法改正で都市計画施設に緑地が加わった。

都市計画法は1920年1月に東京、大阪など6大都市に適用され、次いで1923年(大正12年)5月、札幌、堺、新潟、浜松、仙台、広島、福岡など全国25都市に適用された^{注1) 1)}。この31都市が日本で都市計画法が早い時期から適用された主要都市である。その後、全国における都市計画法適用の都市数は1932年に104都市に増加した^{注2) 2)}。

当時、都市計画法が適用された都市の一般的な状況は、先ず測量と地形図作成が行われ、都市計画区域の範囲を定め、街路と用途地域の都市計画決定が行われた。公園は街路、用途地域と並ぶ3本柱であったが、公園が実際に決定された都市は街路、用途地域と比べると相対的に少なかった^{注3) 3)}。こうした事態に対して、内務省は先ず、1924年の都市計画主任官会議で各都市計画地方委員会に「公園系統計画根本調査の件」として「統一的な公園計画を確立し」と指示し、1936年都市計画課長通牒「公園其の他緑地計画に関する件」を各地方長官宛に出し、「都市計画街路、地域は相当決定を見、……未だ公園緑地に関する決定は不充

分を免れず」と公園緑地に関する計画の推進を指示している³⁾。

1920～1945年(都市計画法施行から敗戦までの戦前)に決定された都市計画公園、都市計画緑地に関する全国の一般的状況については佐藤昌の大著⁴⁾があるが、個々の都市に関する詳細な研究は蓄積が少ない。当時日本が影響を受けた欧米の都市計画思想は、19世紀後半～20世紀初めの公園緑地系統(パークシステム)、20世紀前半の田園都市、地方計画(リージョナル・プランニング)、緑地帯(グリーンベルト)などである(佐藤昌⁴⁾、石川幹子⁵⁾)。この影響については、当時の『都市公論』『公園緑地』^{注4) 4)}に多数の論考・翻訳が掲載されていること^{注5) 5)}、また戦前の池田宏、飯沼一省、武居高四郎などによる都市計画の代表的な著書からも明かである。また1939年に内務省が策定した東京緑地計画は1940～1945年の全国各地の公園緑地の基本思想をつくった重要な計画であるが、この東京緑地計画の解説書にはボストン、シカゴ、ロンドン、ベルリンなどの公園緑地系統、緑地帯の計画図が収録されている^{注6) 6)}。

1920～1945年の日本の公園緑地に関する既往研究は、内務省は佐藤昌⁴⁾、日本公園緑地協会⁷⁾、越澤明⁸⁾、内務技師として公園緑地行政の責任者であった北村徳太郎⁹⁾、木村英夫⁹⁾¹⁰⁾、東京は前島康彦¹¹⁾、末松四郎¹²⁾、越澤明¹³⁾、名古屋は越澤明¹⁴⁾、名古屋都市センター¹⁵⁾、向口武志¹⁶⁾、大阪は越澤明¹⁷⁾などが存在する。1940～1945年、日本の主な都市で公園緑地の決定、事業が進展する。しかし『公園緑地』に東京、

* 北海道大学大学院工学研究科 大学院生
** 北海道大学大学院工学研究科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Eng., Hokkaido University
Prof., Graduate School of Eng., Hokkaido University, Dr. Eng.

大阪、名古屋、横浜、川崎に関する記述は存在するが⁷⁾、札幌に関する記述は皆無であり、佐藤昌の著作⁴⁾にも言及がない。『札幌市史』¹⁸⁾、『新札幌市史』¹⁹⁾、『さっぽろ文庫 64 公園と緑地』²⁰⁾では都市計画公園についての概要のみが記載されている。

本研究は 1942 年、43 年に決定された札幌における最初の都市計画公園の全体像、内容、特徴を明らかにすることを目的とする。研究の方法としては、都市計画決定の事務を担当していた都市計画北海道地方委員会⁸⁾ ²¹⁾、公園事業の主体である札幌市の公文書²²⁾を調査、収集、解読し、合わせて都市研究会²³⁾、公園緑地協会²⁴⁾、札幌市²⁵⁾²⁶⁾の刊行物を調査、参照した。都市計画北海道地方委員会、札幌市の公文書を使用した都市計画公園に関する研究は本論文が最初である。

図 1 札幌市所蔵の都市計画決定図書の一部⁹⁾ ²²⁾

2. 札幌の都市形成と都市計画の適用

2-1、明治大正期の都市形成と公園緑地

1869 年(明治 4 年)、明治政府は北海道の政治の拠点を札幌に置き、計画的な都市建設を開始した¹⁰⁾。当時の面積は 524ha、人口は 624 人であったが、1899 年(明治 32 年)区制が実施された際、人口は 40,578 人に増加した(表 1 参照¹¹⁾)。

表 1 札幌の面積と人口の推移*

年	面積 (ha)	人口(人)
1869 年	524	624
1886 年	1,438	14,935
1899 年	1,438	40,578
1910 年	2,417	88,841
1922 年	2,417	127,044
1933 年	2,417	188,839
1942 年	7,625	225,457
1947 年	7,625	292,659

『札幌市史 第 2 巻通史 2』²⁷⁾ 『同 第 3 巻通史 3』²⁸⁾
『同 第 4 巻通史』²⁹⁾より作成。

1910 年(明治 43 年)札幌区の区域は拡大され¹²⁾、面積は 2,417ha、人口は 9 万人近くとなった。1922 年(大正 11 年)市制が施行され、人口は 12 万 7 千人となり、全国 90 都市中 13 番目の都市に成長していた。こうして札幌は北海道の中心都市として順調に成長を続けたが、大正期は新たな公園緑地は確保されず、市街化が進行した。当時の主な公園緑地は、防火帯としての大通追越地¹³⁾、博覧会会場にも使用され賑わい

を見せていた中島公園¹⁴⁾、札幌神社境内の自然地況を生かした円山公園¹⁵⁾であり、何れも明治期の遺産であった¹⁶⁾。またその位置は市街地中心から南・西側に偏っていた¹⁷⁾。

2-2、都市計画法の適用と都市計画区域

1923 年(大正 12 年)、札幌に都市計画法が適用され、翌 1924 年から都市計画区域設定のための調査が開始された。1927 年(昭和 2 年)に決定した札幌都市計画区域は、将来人口を 50 万人と予測し、1 時間以内に市の中心地点へ到達できる範囲、すなわち大通と停車場通(現在の駅前通り)の交差点を基点とする半径 4 マイル(約 6.4km)の区域内、約 10,440ha であった¹⁸⁾。その区域には郊外の豊平町、白石村、札幌村、琴似村、藻岩村の一部も含まれていた。

表 2 札幌市と郊外町村の人口¹⁾

	1922 年(人)	1942 年(人)
札幌市	127,044	225,457
札幌村	7,062	5,154 ²⁾
白石村	6,371	10,783
豊平町	11,284	21,703
琴似村	6,344	11,739
4 町村計	31,061	49,379
総 計	158,105	274,836

*1 『札幌市史 第 4 巻通史 4』²⁹⁾ 166 項より作成。

*2 1934 年(昭和 9 年)札幌村の一部が札幌市に編入され、札幌村の人口は 10,213 人から 4,139 人と減少した。

図 2 1927 年決定札幌都市計画区域図

『札幌都市計画区域設定参考資料』³³⁾(縮尺 1:50000)に筆者がマイル数と地名を加筆。(決定区域は 4 マイル以内の区域)

2-3 都市計画街路と風致地区

札幌では都市計画区域の決定後、1945 年(昭和 20 年)にかけて次のような都市計画が決定されている²⁵⁾²⁶⁾²⁹⁾¹⁹⁾。

- 1933 年 8 月 用途地域 (4 種類)
- 1936 年 9 月 都市計画街路 (60 路線)
- 1939 年 7 月 風致地区 (14 地区)
- 1942 年 5 月 都市計画公園 (3 公園)
- 1943 年 5 月 都市計画公園 (2 公園)
- 1944 年 8 月 土地区画整理 (東札幌)

街路、風致地区についてその決定の考え方を公文書（理由書、図面、議事録）²¹⁾²²⁾から検証すると、1つの計画思想の存在が見えてくる。

札幌の都市計画街路の特徴は、将来の都市発展を見越して、まだ市街化が始まっていない郊外地（農耕地、樹林地、低湿地）に対し、幅員55～110mの広幅員街路（広路）を放射・環状に7路線配置して都市計画街路網の骨格をなしていることである。4路線には都市河川を取り込み、断面の過半はオープンスペース（植栽帯と水面）であった。また、やちだも公園通、新川公園通、伏籠公園通という名称からも公園道路（パークウェイ、ブルヴァール）²³⁾として計画されていたことが判明する³⁶⁾。

札幌の風致地区の特徴は、市街地の南・西部を取り囲む丘陵・山岳地帯に加えて、上記の広幅員街路や河川沿いを細長い路線型風致地区に指定し、全市的な放射環状のパークシステム（公園緑地系統）とグリーンベルト（緑地帯）を形成している点にある²⁴⁾²⁵⁾。

No.	風致地区	面積 (ha)	No.	風致地区	面積 (ha)
1	大通風致地区	33.39	8	月寒台風致地区	184.9
2	清華亭風致地区	4.36	9	豊平川上風致地区	388.42
3	創成川通風致地区	85.19	10	藻岩山風致地区	1000.4
4	大学雁来通風致地区	51.20	11	札幌神社風致地区	775.41
5	伏籠公園通風致地区	59.22	12	豊平川下風致地区	58.17
6	豊平川下風致地区	141.70	13	新川公園通風致地区	44.18
7	白石平岸通風致地区	63.67	14	やちだも公園通風致地区	19.05

図3 札幌市風致地区図（1939年決定）²⁶⁾

原図は縮尺1:50000。図中の番号と方位、スケールは筆者が記入。

また下表も筆者作成による。それ以外は原図のままである。

都市計画決定の理由書には次のように広路のもつ保健、美観、防災の機能に加えて、将来の都市計画公園の連鎖に言及した注目すべき記述が存在する²²⁾。

「今後の都市施設として緑地帯の存置は、独り市民の保健及び都市の美観上必要なるのみならず、偶々、火災其の他の災禍の突発に際してはこれら施設にまつべきも大なるものを以て、現在、市内及び近郊に点在せる公園及び自然緑地と連繫をとり、且、将来の都市計画公園の連鎖たらしむべく、広路及び緑樹帯を考慮したる幹線街路を配したり。」²¹⁾

（傍点は引用者による、以下同様）

また風致地区決定の理由書には次のような記述がある²²⁾。

「豊平川、創成川、発寒川、伏籠川等と共に流水沿岸何れも独特の景趣を有す。……やちだも公園通、大学雁来通、白石平岸通等は何れも樹林蜿蜒、環状の翠帯は市街地を抱擁し、前記各所と共に、市民の保健慰楽上、密接なる関係にあり、依って、これらを風致地区に指定し、以て市街地の発展に伴う風致景勝の毀損を防止し、併せて、その保育を図らむとする。」

以上より札幌においては都市計画街路、風致地区、都市計画公園が1つの計画思想（パークシステム、グリーンベルト思想）のもとに計画されていたことが判明し、これは札幌都市計画の大きな特徴である³⁶⁾。またこうした特徴は、当時の内務省の都市計画思想の反映であり、同時期に東京、大阪、名古屋、横浜などで決定された都市計画緑地の考え方・配置とも共通性が存在する。

しかしこれらの大都市の都市計画（街路、風致地区、公園、緑地など）と札幌を比較すると、札幌には次のような特色、相違点が存在している。
①広路（広幅員街路）は他都市では少なく、都心に限定され（東京では行幸道路、昭和通り、大阪では御堂筋、名古屋と横浜はなし）、パークシステムを構成していない。一方、札幌では広路が全市的なパークシステム、グリーンベルトの構成要素となっている。また広路、風致地区、公園の決定が連動しているのは札幌のみである。なお同時期の台湾や満州では広幅員街路が全市的なパークシステムやグリーンベルトの一部を構成している都市が存在する（台北、新高港、新京、大東港など）³⁴⁾。
②札幌では広路（広幅員街路）の沿道を風致地区とし、相乗作用で緑地帯としているが、このような計画は札幌のみである。なお広路より幅員が狭い並木道で風致地区が決定された事例として東京の表参道・裏参道があるが、全市的なパークシステムではない。
③風致地区を広路、並木道、河川、公園などと連動して全市的な放射環状のグリーンベルトとなるよう当初から都市計画決定している点は札幌の特徴である。

1930年代・40年代の全国各地の風致地区を検証すると、京都³⁷⁾、鎌倉、北九州など5市では風致地区は全市的な環状グリーンベルトとなっているが、風致地区の単独決定である。また、西宮では風致地区が六甲山麓、夙川、夙川公園²²⁾、海浜をつなぐパークシステム、グリーンベルトとなるよう決定されているが、広路は決定されていない。また名古屋では1939年当初決定の風致地区は高級市街地の形成を目的としており、緑地はその外側に決定され、さらに緑地を包含して風致地区が1942年追加決定されており、風致地区指定の趣旨が変化している¹⁵⁾。

路線的風致地区開発豫想断面図

図4 路線的風致地区開発予想断面図²⁴⁾

上は大学雁来通風致地区と白石平岸通風致地区の設計予想断面。

下は伏籠公園通風致地区の設計予想断面である。

以上のような特色を有する公園緑地計画が札幌で実践された背景としては、①札幌は明治期の都市建設により、既成市街地のインフラ整備が終了しており、都市計画の重点課題を郊外に置けたこと、②関東大震災、函館大火の復興計画の経験、蓄積があったこと、③内務省は欧米のパークシステム、グリーンベルトの調査研究を進めていたこと、④札幌では郊外の丘陵、河川など地理的な条件に恵まれていたこと、などが考えられる。

街路、風致地区が決定されてから数年後、1942年(昭和17年)と1943年(昭和18年)の2度に分けて、「将来の都市計画公園の連鎖」を実現する札幌初の都市計画公園が決定された。1942年に決定されたのは美香保・白石・豊平の3公園であり、1943年に決定されたのは琴似・伏籠の2公園である。5公園の面積は合計で約73haであった。

3、1942・43年決定都市計画公園の全体像

都市計画決定の際に添付された「公園計画理由書」³⁹⁾(図1)では、次のように現況を踏まえた上で公園配置計画の考えを述べている。

「…今、市内の公園配置を一瞥するに円山、中島及び大通の3市営公園とその他公開緑地として植物園、豊平館庭園等あり。何れも市民により活用せられ、その配置また略々適当なりというべきも、市の近郊にして遠からずして市街化せんとする北部及び豊平川の東部を見るに一の公園緑地施設の見るべきものなし。茲において都市計画広路5号線及び7号の環状緑地帯に沿い、平戦両時の利用を考慮し、約2キロメートル間隔

に4ヶの公園^{註1)}を配置し、その合計面積約56.5ヘクタールとす。」つまり半径3kmから5km圏内に約2kmの間隔で均等に公園を配置する方針が示されている。(図5)

この都市計画決定には、市街化が進行し、地価が高騰する前に公園緑地を確保するという意図があった。「美香保公園計画理由書」⁴⁾(図6)には、次のように書かれている。

「…特に美香保公園予定地は既にその敷地内に二、三人家を抱擁し、これをこのまま放任するにおいては遂に家屋密集し、地価高騰して愈々実施困難に陥るのところがあり。ここにおいて将来運動公園を主眼とせる美香保公園予定地の内地積約6,612ヘクタールを買収し、差当り支障物件を移動除去し、運動公園として利用し得る最小限度の施設を行い、将来時局の安定と市財政の許容する範囲において種々計画的施設の完成を期せんとするものなり。」

さらに平時の保健慰楽という目的のほかには災害時の防災緑地という役割も想定されていた。「豊平公園計画理由書」⁴⁾には、公園の均等な配置と利用の考え方に加えて次のような記述がある。

「従ってこれが完成の暁に於て札幌市は愈々その現代都市としての要素を具備することとなり、名実とも北海道の首都としての体裁を整うと共に、従来この種の公園の均齊的利用に恵まれざりしこの方面の市民に一大恩恵を与うることとなるものにして、すなわち平素保健慰楽のため用に供せらるるはもちろん、一朝非常災害の時に当たりては極めて必要な防空防火の保安緑地を得ることとなるものなり。」

図5 1942年決定都市計画公園配置図²⁾

札幌市所蔵。原図は1:25000。右上の図名は原図の表紙に記載されていたものを移動。
公園名と公園区域は図面縮小により判読しにくくなったため、筆者が太字で加筆。

図6 美香保公園計画理由書^{注24)} 札幌市所蔵

平時に加えて、非常災害時における公園緑地の機能、役割を想定することは今日でも同様である（広域避難地、防災拠点など）。しかし、既述の理由書^{注9)} ^{注24)}に加えて、以下で詳しく明かされるように、札幌の都市計画公園の主目的は非常災害時よりも平時の保健慰楽に重点が置かれ、運動場、競技場、市民農園などが公園の主な内容であった。また公園区域も必要な範囲に限定しており、面積も最大で約40ha、多くが約7~10haの大きさにとどまっている。

同時期、1940~1943年、東京、大阪、名古屋、横浜などの大都市では同じ内務省のグリーンベルト思想に基づきながらも、種別は緑地で、面積は大規模（多くは面積80ha以上）に都市計画決定されている^{注74)}。この相違点をもたらした原因、背景としては次の点が考えられる。

①東京、大阪、名古屋、横浜などでは1940年以前に都市計画公園が既決定であり、その一部は整備されていた。それに加えて、1940年代前半新たに、既存の都市計画公園よりも外側の郊外に環状緑地帯（都市の膨張を抑制するグリーンベルト）を実現する第1歩として、郊外の丘陵地、低湿地などに広い面積で緑地を決定し、施設はあまり整備せず、自然地形を生かした活用を想定している^{注25)}。

②都市の規模、都市化の進展はかなりの格差がある。札幌は人口20万人台で漸増している中規模の都市であった（表1、表2参照）。一方、東京、大阪、名古屋、横浜などは大都市であり、名古屋、横浜もこの時期に人口が百万を突破している（例えば横浜の人口は1927年は53万、1939年は87万、1942年は104万と激増）⁴³⁾。

4. 個々の公園計画の特徴

次に個々の公園の特色を論じる。美香保公園、豊平公園、琴似公園は新市街地の公園としてほぼ同様の性格を有している。白石公園と伏籠公園はそれぞれ地理条件や現況を生かした特徴が加わっている。

1) 美香保公園

美香保公園は、鉄道以北の市街に北海道帝国大学構内のグラウンドを除くと運動場となる土地が無かったため計画された。当時、札幌は全国有数の不健康都市^{注24)}であり、運動公園が切実に必要とされていた。「美香保公園計画理由書」⁴⁰⁾ ^{注24)}には「一年の約半分を寒気と積雪との内に送る一般市民は、戸外生活を営むの気運極めて稀なるを以て……戸外運動施設の必要を痛感する。」とある。なお5箇所の公園の設計予想図には陸上競技場や球技場に加えて、水泳場や角力場まで図示されたものもある。

美香保公園の計画地は、大正期まで大半が牧草地であり、昭和3年いったん宅地分譲されたが、人家はまだ少なかった。設計予想説明書⁴⁴⁾によると東西約244m、南北約340m、面積8.278haを有し、北部に約200㎡の広場、南部には幼児や少年のための遊戯場を設け、周囲は風致と風防を兼ね、幅10mの緑樹帯を置く予定であった。

図7 1942年決定美香保公園設計予想図²²⁾ 札幌市所蔵

原図は縮尺1:3000.

2) 白石公園

5公園の中で最大面積39.202haの白石公園は、市街地東部の中心公園となるよう豊平川と一体化して計画された。「白石公園付近地現況」⁴⁶⁾には「…現在国道27号に沿い、交通便利にして付近一帯工業的發展を遂げん傾向にある中に保留されたる重要な緑地なり」とある。

この付近は豊平川下風致地区に接し、良好な自然緑地が広がっていたが、周囲が鉄道や国道に囲まれるという交通の利便性から工業化の進展が予測されたため、先行的に公園の確保を図ったのである。

この公園の特色としては、豊平川沿いや公園外周部に食料確保のための市民農園が大規模に計画されていたことが挙げられる。計画面積中約23.8haは運動公園として陸上競技場や球技場、体育館を設け、残りの約15.4haは市民農園として一般に開放される計画であった。

図8 1942年白石公園の設計予想図²²⁾ 札幌市所蔵

原図は縮尺1:3000. 図中の市民農園という文字は

判読しにくかったため筆者が加筆。

3) 豊平公園

豊平公園は市街地東南部に位置し、広路7号白石平岸通に接し、計画面積は7.825haであった。公園予定地は一部が田畑、大部分は果樹園であり、人家は1戸のみであった。しかし近い将来に市街化の可能

性があるものとして公園設置が計画されたのである。設計の内容は、陸上競技場、遊戯場等の他、1.1ha の逍遙園を配し、「休養公園としての機能を具備」⁴⁶⁾ していた。

4) 琴似公園

琴似公園は市街地西部の新たな公園として計画され、面積約 6.7ha の土地で、住宅が 2 戸あるほか蔬菜栽培地で、278 坪は国有未開地であった。付近には農事・工業の両試験場をはじめ時局産業に関する各種工場があり、交通の便と良質の飲料水に恵まれ、住宅地として発展を遂げつつあった。公園の内容は他と同様、競技場や遊戯場が計画された。

5) 伏籠公園

伏籠公園は市街地北東部に計画され、屈曲した伏籠川をそのまま利用して公園内に取り込み、豊かな自然地形を生かした公園であった²⁶⁾。さらに広路 5 号大学雁来通、広路 6 号伏籠公園通と一体となり、水と緑の豊かなオープンスペースとなることが目指されていたのである³⁶⁾。

約 11.4ha の公園予定地のうち 3 分の 1 が河川並びに堤防敷地であり、他は 5 戸の住宅を有する高燥肥沃な民有の畑地であった。また河畔には芦が繁茂し、榎や胡桃などの木があり、川を隔てた対岸には札幌村第一国民学校が位置していた⁴⁶⁾。この公園は、面積 11.4ha の敷地に運動公園、児童遊戯場、逍遙園を設置する予定であった。

図9 1943年伏籠公園設計予想図

札幌市所蔵資料の『伏籠公園付近地現況図』²²⁾ (縮尺 1:3000、青焼き) を基に都市計画街路と公園区域線をトレースし、その上に『伏籠公園設計予想図』²²⁾ (縮尺 1:3000) を貼り付けて作成。なお伏籠公園通、大学雁来通の両端 30m までは風致地区に指定されている。また設計予想図の中央部は破損している。

5、公園事業とその推移

5 箇所の都市計画公園は 1942、43 年計画決定されると同時に何れも事業決定され、執行年度割が定められた⁴⁹⁾⁵⁰⁾。美香保公園、豊平公園、琴似公園、伏籠公園は札幌市長の施行とし、当時白石村に属していた白石公園は北海道長官が施行するとされた。

しかし、それぞれの公園は 1945 年 (昭和 20 年) までに何れも用地買収は完了したものの、整地や施設は未着手のまま終戦を迎える。その中で唯一開設されたのは美香保公園であった。

戦後、残り 4 箇所の都市計画公園の用地は、自作農創設地として国に買収された。これは全国の大都市と共通の現象であり、札幌も例外ではなかった⁴⁾。これが戦前決定の都市計画公園が計画どおり実現されなかった一番大きな理由である。

その結果 5 つの都市計画公園は、下記のように大半が面積を縮小、あるいは計画を廃止して現在に至っている。

- ・美香保公園 8.3ha → 計画どおり開設
- ・白石公園 39.2ha → 2.7ha (昭和 51 年)
- ・豊平公園 7.8ha → 廃止 (昭和 35 年)²⁷⁾
- ・琴似公園 6.7ha → 2.0ha (昭和 41 年)
- ・伏籠公園 11.4ha → 6.6ha (昭和 46 年)

しかしその一方で札幌の郊外の新市街地では 1950 年代以降、小規模な児童公園や近隣公園が整備されていった。

6、総論

1942、43 年に決定された札幌の都市計画公園についてその特徴と意義をまとめると次のようになる。

①札幌では用途地域、街路、風致地区に続いて公園の決定を行った。この都市計画公園は既存の公園と将来の公園配置を勘案して、新市街地を環状に取り囲むよう、ほぼ均等に配置された。つまり札幌の都市計画公園は個々に決定されたものではなく、全市的な公園配置計画に基いている。なお全市的な都市計画公園の決定は既に東京、名古屋、大阪などで事例があり、札幌が最初ではない。

②札幌の都市計画公園は都市計画街路、風致地区と密接な関係を持ち、一連の都市計画として決定されている。この三者を結ぶものはパークシステム、グリーンベルトの計画思想である。札幌では街路と公園という最も基本的な都市施設が有機的に計画され、この両者を風致地区が繋いでいる。札幌の都市河川の多くは都市計画街路 (広路) と風致地区に決定されており、公園と河川も一体化した都市計画となっていた。札幌の都市計画公園には公園、街路、河川を融合して緑地空間を形成しようとする都市計画思想が見られる。

③全国の都市計画決定の案件は都市計画地方委員会の原案を経て、本省 (内務省都市計画課) が内容を指導しており、札幌の都市計画には内務省の都市計画思想が反映されている。1930 年代、内務省では飯沼一省 (都市計画課長)、北村徳太郎 (公園主任技師) らが欧米の地方計画、緑地計画を調査研究し、『都市公論』『公園緑地』誌では多数の論説や翻訳が発表されている⁵¹⁾⁵²⁾。また東京緑地計画や 1940 年の都市計画法改正を受けて 1940~1943 年、東京、大阪、名古屋、横浜、川崎などで大規模な緑地が都市計画決定された。札幌の都市計画公園も当時内務省が推進した緑地計画の成果の一つである。

④同じ内務省の緑地計画の思想に基づき決定された公園緑地でありながら、札幌では比較的面积が小さな公園、他の大都市では面積の大きな緑地が決定されている。このような相違点は都市の規模、公園緑地に要請される施設内容が背景となっており、全国の中規模都市の中では札幌はグリーンベルト思想を忠実に実践した先進事例である。札幌で先進的な都市計画を具体化できた背景には、既成市街地がインフラ整備済みであり、新たな計画課題に取り組む事を可能とする条件を有していた。いいかえれば、都市計画の実験場としての条件が備わっていたためである。

⑤札幌の都市計画公園の施設は主に戸外リクリエーションを想定してお

り、軍事施設や防空施設は予定していない。1943 年東京、大阪では防空法に基づく空地帯が指定されたが、札幌では指定されていない。札幌の都市計画公園は平時の市民利用を主目的としており、この事は都市計画決定や事業の説明書、設計予想図からも明らかである。

論文の最後に付言すると、札幌の都市計画公園事業化の推移、また都市計画公園と関連していた都市計画街路と風致地区の戦後の状況など、これらの課題については別の論文として研究発表を行う予定である。

謝辞 札幌市環境局緑化推進部公園計画課、企画調整局計画部都市計画課の皆様には保存文書の閲覧等で大変、お世話になったことに謝意を表します。

注釈

注 1) 1923 年 5 月に人口 9 万以上の都市及び特に必要と認めた都市に都市計画法の適用が拡大された。その 25 都市は次のとおり。札幌、小樽、函館、堺、尼崎、新潟、豊橋、静岡、浜松、岐阜、仙台、金沢、岡山、広島、呉、下関、福岡、門司、小倉、若松、八幡、大牟田、熊本、長崎、鹿児島¹⁾。

注 2) 1933 年の都市計画法改正により町村まで都市計画が適用可能となり、1935 年に全国で 128 市、322 町村に適用され、1940 年には全国で 177 市、451 町村に適用された。1940 年現在の全国における都市計画決定の状況は、街路については 159 市、115 町村で決定され、用途地域は 93 市、5 町村で決定されているが、公園の決定は 49 市、17 町村であった²⁾。

注 3) 1935 年現在、公園が都市計画決定されたのは全国で東京、横浜、名古屋、大阪、函館、富山、岐阜、長野、長崎、鹿児島³⁾の 10 都市。このうち東京、横浜、函館は災害復興計画の一環として決定されている³⁾。

注 4) 両雑誌共に内務省都市計画課が実質的な編集を担当している。

注 5) 代表的な論考を挙げると、北村徳太郎：都市の緑地問題、都市公論、13 巻 1 号、1930 年、北村徳太郎：地方計画を通しての緑地計画、都市公論、17 巻 1 号、1934 年、内務省：時局と緑地計画、公園緑地、4 巻 3 号、1940 年。

注 6) 『東京緑地計画概要』（東京府、1938 年）にはボストン広域パークシステム（1902 年）が東京緑地計画と比較して図示されている。また、『公園緑地』東京緑地計画特輯号（1939 年 3 月）では「世界都市緑地計画比較図」として 9 都市、東京緑地計画、新京、ワシントン、ニューヨーク、シカゴ、ロンドン、ウィーン、パリ、ベルリンの「公園系統図」「緑地計画図」が図示され、解説されている。

注 7) 『公園緑地』誌に掲載された東京、大阪、名古屋、横浜、川崎に関する論考の例は次のとおり（掲載誌の発行年月を記す）。1939 年 3 月の東京緑地計画特集、1939 年 12 月の大阪特集、1940 年 4 月の東京大緑地特集、1940 年 9 月の満州特集、1940 年 11 月の名古屋大緑地計画、1941 年 3 月の横浜大緑地計画、川崎に於ける大緑地造成、1941 年 10 月の大阪府に於ける大緑地設定に就いて、1942 年 2 月の統東京緑地計画特集、1942 年 9 月の大阪都市計画事業緑地計画とその運営、名古屋都市計画緑地事業概況、川崎市の緑地事業。

注 8) 都市計画地方委員会は、大正 8 年 11 月 27 日勅令第 483 号「都市計画委員会官制」によって設置されたもので、内務大臣の監督に属する内務省の出先機関である。そのため、内閣印刷局が編纂発行する「職員録」では内務省の欄に都市計画地方委員会が記載されている。

注 9) 本文書の記載内容は以下の通りである。傍点は引用者が加えた。

「札幌市都市計画公園計画及事業決定二関スル件

都市計画公園琴似及伏籠二対スル計画並ニ事業決定資料左案ニ依リ夫々提出相成可哉 案 札土都第 8 号 昭和 18 年 2 月 市長」

「一、公園計画理由書

札幌市ハ北海道文教政治ノ中心地ニシテ規矩整然且広闊ナル街路ニ配スルニ繁茂セル樹木、広饒ナル緑地ト清冽ナル豊平川、創成川並ニ伏籠川等ノ水流アリ又曩ニハ都市計画街路地域及風致地区並美香保、豊平、白石ノ 3 公園等ノ決定セラルルアリテ都市計画トシテハ稍完備セルノ感ナキニアラザルモ市勢ノ目覚シキ伸展ハ計画区域内包含人口トシテ予想スル 50 万都市実現モ遠キニ非ズト推察セラルルトキ平素市民ノ保健体育上ハ勿論一朝有事ノ際ハ保安上公園緑地ヲ適ナル距離配置スルコトハ極メテ必要ナルノミナラズ現下国土防衛ノ見地ヨリモ之ヲ他ノ既成都市ノ実情ニ鑑ミ忽ニ為シ得サルモノアリ旁今市内公園及是ニ準スルモノノ配置ヲ一瞥スルニ円山、中島、山鼻及大通ノ市営公園ノ外植物園」(左)

注 10) 札幌区役所編『札幌区史』1973 年、782 頁には次のような記述がある。「…明治 4 年岩村判官西村権監事等の再経営に於ては、札幌本府の敷地をさらに北方東創成通西 4 丁目南角に相して建築し、同年札幌市街の区画を定むるや、該廠を中心として方 1 里の地を以て市街と定め…。」

注 11) 資料として宮地常助²⁴⁾、『札幌都市計画』²⁵⁾『新札幌市史 第 2 巻通史 2』²⁷⁾『同 第 3 巻通史 3』²⁸⁾『同 第 4 巻通史 4』²⁹⁾を用いた。

注 12) 札幌市教育委員会編『新札幌市史 第 3 巻通史 3』1994、117-119 頁によると明治 43 年 4 月 1 日、札幌市の南西部、白石村字上白石村、豊平町豊平村の札幌区に接続する地域と藻岩村大字山鼻村の元屯田兵村ほぼ全域を札幌区に編入する一方、札幌区内であった現在の北 26 条以北の地域が琴似村へ編入された。

注 13) 1871 年（明治 4 年）開設。現在の大通公園。

注 14) 1887 年（明治 20 年）開設。

注 15) 1903 年（明治 36 年）公園予定地として払下げを受ける。

注 16) 札幌で最初にできた公園“倍楽園”（1871 年開設）は中島公園の開設に伴い衰退して、1897 年（明治 30 年）当時の実力者対馬嘉三郎に払い下げられた。

注 17) なおその当時の状況に関しては札幌市教育委員会編『札幌歴史地図（明治編）』³⁰⁾『同（大正編）』³¹⁾『同（昭和編）』³²⁾に図面がある。

注 18) これは当時の市域 2417ha の約 4.3 倍に当たる。

注 19) この他に、都市計画街路の変更、圓山町の編入に伴う都市計画区域と用途地域の変更が存在するが、省略する。

注 20) 日本におけるパークウェイ、ブルヴァールの全体像については、参考文献 34)、35)を参照。

注 21) 引用に際しては、原文の旧漢字やカタカナを新漢字、ひらがなに適宜改め、句読点を加えた。また傍点は引用者が加えた。以下同様。

注 22) 1932～1937 年、兵庫県西宮市では市内の主要河川である夙川を都市計画事業により全面的に公園化している。これは河川を都市計画街路（遊歩道と植樹帯からなる街路）に決定して公園をつくるという先進的で特異な都市計画であった³⁸⁾。

注 23) この「4 ケの公園」は伏籠公園が 1943 年（昭和 18 年）の決定となったため「3 公園」に変更になり、1943 年の琴似、伏籠の 2 公園と合わせて最終的には 73.4ha が計画された。

注 24) 内容の一部は次の通りである。傍点は引用者が加えた。

「美香保公園計画理由書

札幌市ハ北海道ノ首都トシテ従来都市計画上必要ナル各種施設ノ整備充実ニ留意シ来リシカ保健施設ニ至リテハ将来一般ノ努力ヲ要スルモノアリ即チ一年ノ約半分ヲ寒氣ト積雪ト内ニ送ル一般市民ハ戶外生活ヲ営ムノ氣運極メテ稀ナルヲ以テ之レカ積極的対策トシテ温暖地方ノ諸都市同様戶外運動施設ノ必要ヲ痛感スル処ナレトモ現在適当ナル公園ヲ有セサルカ為メ青少年ト雖屋内ニ盤居ヲ余儀ナクセラレ為メニ稍モスレハ全国有数ノ不健康都市ノ名サヘ冠セラル今ヤ長期建設下国ヲケテ国民体位向上ニ努力シツツアリ特ニ体質ハ年々著シキ低下ヲ示シ之レカ改善方法トシテ都市計画公園緑地ヲ増設シテ戶外体育施設ノ完成ニ専念シツ

ツアルノ時一度札幌市カ所有スルカ

注 25) 大阪府の大緑地では馬事訓練場、芝生（大教練場）、厚生運動施設、船艇修練施設などを予定したが、「右施設は各緑地の天然の地形、地物を出来る限り利用」との方針で、しかも、「広大なる土地が将来大阪府民の自由空地として公有に帰し、公共の用途を発揮することを想へば、土地獲得の成功するのみを以て大半其の目的を達し得たる」⁴²⁾と明確に述べており、軍事的、防空的な色彩は実際にはほとんど存在せず、また、高射砲陣地などは設置されていない。これは東京、横浜、川崎、名古屋でも同様であり、大緑地を何に使用するか県庁各課から要望を提出させている^{注7)}。

注 26) 伏籠川は古い札幌川という意味で、かつてはその名のとおおり、豊平川本流の下流部分として流れ、肥沃な沖積地帯をつくりあげた。しかし戦後、札幌市の人口増加に伴い、汚染が激しくなり、直線状に改修され、さらに埋め立てられた⁴⁷⁾。

注 27) 現在の豊平公園は、1975 年（昭和 50 年）近隣公園として計画されたものである。面積は 7.4ha であるが、1942 年の計画とは異なる場所にあるため別の公園と考えて良い。

参考文献

- 1)都市計画協会編『近代日本都市計画年表』都市計画協会、1991。
 - 2)『都市計画史』12～21 頁、1966。同書は都市計画協会が都市計画行政史の編纂準備のために取りまとめた刊行物、建設省の元幹部職員が執筆。
 - 3)越澤明：公園緑地計画の展開と近代日本都市計画、都市計画、176 号、18-23、1992。
 - 4)佐藤昌『日本公園緑地発達史』都市計画研究所、1977。
 - 5)石川幹子：ポストンにおける公園緑地系統の成立に関する研究、造園雑誌、54(5)、84-89、1991。石川幹子：ポストンにおける広域パークシステムの成立に関する歴史的研究、都市計画論文集、28 号、565-570、1993。石川幹子：ミネアポリスにおける公園緑地系統の成立に関する研究、造園雑誌、56(5)、43-48、1993。石川幹子：ロンドンのグリーン・ベルト計画思潮の変遷に関する歴史的研究、都市計画論文集、29 号、331-336。
 - 6)佐藤昌『日本の公園緑地 120 年の歩み』日本公園緑地協会、1993。
 - 7)日本公園緑地協会編『日本公園百年史』日本公園緑地協会、1978。
 - 8)北村徳太郎先生生誕百年記念事業実行委員会編『北村徳太郎公園緑地論集』日本公園緑地協会、1995。
 - 9)木村英夫：内務省時代の都市計画の回想—本省、都市計画、144、1986。
 - 10)木村英夫『都市防空と緑地・空地』日本公園緑地協会、1990。
 - 11)前島康彦『東京公園史話』東京都公園協会、1989。
 - 12)末松四郎『東京の公園通誌』東京都公園協会、1981。
 - 13)越澤明『東京の都市計画』岩波書店、1991。
 - 14)越澤明：名古屋の都市計画の成り立ち、アーバン・アドバンス、6 号、133-141、1995。
 - 15)名古屋都市計画局、名古屋都市センター編『名古屋都市計画史（大正 8 年～昭和 44 年）』名古屋都市センター、91-99、163-174、1999。
 - 16)向口武志：『名古屋都市計画公園』の計画理念、日本建築学会計画系論文集、522 号、207-214、1999。
 - 17)越澤明：大阪の公園緑地計画の推移、公園緑地、51(2)、86-94、1990。
 - 18)札幌市史編集委員会『札幌市史 政治・行政編』札幌市、349-358 頁、1953。
 - 19)札幌市教育委員会編『新札幌市史 第 4 巻通史 4』札幌市、314～318 頁、1997。
- このうち都市計画決定に関する記述は 315-316 頁のみであり、全体図、個々の公園

緑地の図面は収録されていない。

- 20)札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫 64 公園と緑地』著作権者札幌市、発行北海道新聞社、208-211 頁、1993。大金善三郎（札幌市公園緑化協会常務理事）執筆の同頁には白石、豊平、伏籠の三公園の設計予想図が収録されているが、記述はきわめて簡単であり、都市計画決定の全体状況に関する記述は無い。
- 21)都市計画北海道地方委員会『都市計画北海道地方委員会議事速記録』。1929 年 5 月の第 5 回～1937 年 10 年の第 15 回の各冊。
- 22)札幌市役所保存文書『札幌都市計画公園計画及事業決定二関スル件』綴り。この保存文書は厚さで約 80cm となる保存文書綴りの総称。
- 23)『都市公論』20(7)、北海道特輯号、1937。
- 24)宮地常助：札幌の風致地区、公園緑地、3(1)、18-24、1939。
- 25)札幌市建設部計画課『札幌都市計画概要』札幌市 1954。
- 26)札幌市建設部計画課『札幌都市計画』札幌市、1960。
- 27)札幌市教育委員会編『新札幌市史 第 2 巻通史 2』札幌市、1991。
- 28) 札幌市教育委員会編『新札幌市史 第 3 巻通史 3』札幌市、1994。
- 29) 札幌市教育委員会編『新札幌市史 第 4 巻通史 4』札幌市、1997。
- 30) 札幌市教育委員会編『札幌歴史地図〈明治編〉』札幌市、1978。
- 31) 札幌市教育委員会編『札幌歴史地図〈大正編〉』札幌市、1980。
- 32) 札幌市教育委員会編『札幌歴史地図〈昭和編〉』北海道新聞社、1981。
- 33)都市計画北海道地方委員会：札幌都市計画区域設定参考資料、1926。
- 34)越澤明：日本における広幅員街路とブルバールの計画・設計思想史、中村良夫・篠原修・越澤明・天野光一『文化遺産としての街路』国際交通安全学会、12-57 頁、1989。
- 35)越澤明：都市計画における並木道と街路樹の思想、国際交通安全学会、22(1)、13-23、1996。
- 36)越澤明：札幌における 1936 年決定広幅員街路の計画思想、土木史研究、19 号、9-20、1999。
- 37) 岩沢周一：京都風致地区指定と其の後、公園緑地、1(6)、12-22、1937。
- 38) 越澤明：パークウェイとして整備された尻川公園の特徴とその意義、国際交通安全学会誌、23(1)、60-69、1997。
- 39)『1、公園計画理由書』1942 年札幌都市計画公園決定資料²²⁾、札幌市。
- 40)『美香保公園計画理由書』1942 年札幌都市計画公園決定資料²²⁾、札幌市。図 6 参照。
- 41)『豊平公園計画理由書』1942 年札幌都市計画公園決定資料²²⁾、札幌市。
- 42) 井本政信：大阪都市計画事業緑地計画とその運営、公園緑地、6(8)、11-13、1942。
- 43) 横浜市建設局計画課：港都建設計画概要、1959。
- 44)『3、設計予想説明書』1、美香保公園より抜粋、1942 年札幌都市計画公園決定資料²²⁾、札幌市。
- 45)『2、現況説明書』2、白石公園付近地現況の口、環境概要より抜粋、1942 年札幌都市計画公園決定資料²²⁾、札幌市。
- 46)『3、設計予想説明書』1、豊平公園より抜粋、1942 年札幌都市計画公園決定資料²²⁾、札幌市。
- 47)札幌東区役所総務部総務課『東区今昔』、1979。
- 48)『2、現況説明書』2、伏籠公園付近地現況の口、環境概要より抜粋、1943 年札幌都市計画公園決定資料²²⁾、札幌市。
- 49)1942 年札幌都市計画公園事業決定資料²²⁾、札幌市。
- 50)1943 年札幌都市計画公園事業決定資料²²⁾、札幌市。
- 51)飯沼一省先生業績録編集委員会編『飯沼一省』都市計画協会、1989。

（1999年12月10日原稿受理，2000年9月6日採用決定）